



Title	HAVE構文の歴史的変遷について : 認知言語学の視点から
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 259-286
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

HAVE 構文の歴史的変遷について

— 認知言語学の視点から —*

早 瀬 尚 子

1. 序

HAVEという動詞のとり補文のタイプは多岐にわたる。共時的に見ても、目的語の後に場所句をとる場合、形容詞をとる場合、分詞形、原形不定詞、そして名詞と、実に様々なタイプの補文が生起可能である。もちろん、その意味もいわゆる「使役」を表すものから、影響を被るという「受動」のものまで、範囲の広いものである。

- (1) a. I have keloid tissue on my back./He has a fly resting on his nose.
b. I had him angry the minute I walked in the door.
c. I had two dogs die of snake bite.
d. She has children come to her house every Sunday.
e. I'll have him a cavalier.

これらの補文構造がどのように互いに関連しあっているのか、その通時的な発展を意味的な観点から捉え直そうというのが本論文の試みである。具体的には、共時的研究の分野で近年関心を持たれている認知言語学の枠組みを歴史的言語変化研究に応用する。それによって、従来の史的研究とは異なった切り口を模索し、問題となる言語形が何故現在ある姿・意味を持つようになったのか、という意味変化過程に、できる限り自然で納得のゆく「説明」「動機づけ」を試みるものである。

まず2節で認知言語学的概念の有効性を示す事例をいくつか紹介し、それを踏まえて3及び4節で多義性を産み出すhave構文を取り上げ、語彙の意味

変化と補文構造の拡張とを関連づける試みをしたい。

2. 認知言語学の知見とその言語変化研究への貢献の可能性

2.1 文法モデル

最近の言語習得にも応用できる枠組みとして、Usage-Based Modelの考え方がある(Langacker (forthcoming-a), Kemmer(1995), Israel(1995), Goldberg Goldberg(1995)など)。このモデルは、話者が実際に言語を使用する中で、新規用法を、基となる用法との類推に基づいて拡張し、カテゴリーのネットワークの中に取り込んでいく、と想定し、常に動き変化するものとして言語の総体を仮定するものである。Kemmerはこれをパターンの結晶化 (Pattern Crystallization) と呼んでいる。

- (2) Pattern Crystallization: New constructions gradually arise when semantico-syntactic patterns crystallize around repeated instances of lexical items (Kemmer (1995))

この考え方に基づけば、構文は、言語使用経験に基づく類推とその共通性の認識に基づくスキーマ抽出との両方により、徐々に拡張し、文法の中に確立されていく、ということになる。

例えばIsrael(1995)では、Sam joked his way into the meeting.などに見られるWay構文のデータをOEDやCOBUILD ON CD-ROM等を基に年代を追って収集し、もともと手段の解釈を表すものと様態を表すものとは別の構文であったこと、年代が下る毎に、すでに用いられた動詞との類似性によってどんどん新たな動詞へと構文が適用・拡張されていくこと、そして最終的には2つの用法からひとつの共通性がスキーマという形で抽出されて、現在のway構文形式になったことを示している。ここでも、類似性に基づく拡張と共通性の抽出によって、構文カテゴリーが現在ある姿に拡大されてきたという、上記のモデルに合致する結果が出ている。

このように、認知言語学の分野においても、Usage-Based Modelに基づいてカテゴリーの形成を歴史的に検討することへの興味が、近年高まりつつあ

る。

2.2 意味変化に関わる認知言語学的概念

2.2 節では、語の意味変化を扱う際に有効な概念として、(i)プロファイルシフト(profile shift)及び(ii)ドメインシフト(domain shift)そして(iii)主体化(subjectification)という3つの概念を紹介し、これらの概念が史的变化でよく見られる現象とどのように関わり、どのような説明を与えるかを考えたい。

まず(i)のプロファイルシフトとはその表現の表す意味の焦点をずらすことであり、語の多義性に深く関わる。例えば、assignmentという名詞は「何かを課すること」という派生名詞としての意味もあるが、それに加えて「課題」という、「何かを課する」の「何か」という部分を特別に具体化した意味をもつ。ここではassignmentという名詞で表される意味の焦点が「行為」そのものから「行為に関わってくるもの」へとずれたことになり、プロファイルシフトの一例となる。

(ii)のドメインシフトとは、その表現が適用される意味の領域、文脈の方をずらすこと、である。例えば、前置詞inには(3a-c)のような用法があるが、基本的には「ある容器の中に入って・存在している」という抽象的な意味(スキーマと呼ぶ)を保持している点では共通している一方、全て、どのような領域を踏まえて理解されているかが異なっている。

(3) a. The kitten is in the box. (空間のドメイン)

b. My son is in school. (社会のドメイン)

c. He was in deep sorrow. (感情のドメイン)

よく指摘されることだが、その本来の意味が十分に失われてスキーマ化している方が、ドメインシフトが可能になりやすい。おそらく、基の領域での意味を引きずっていれば、その意味に制限されてドメインの転用が難しくなるからであろう。

これらの概念は、史的变化におけるカテゴリ転換現象の説明の際に有効に働く。カテゴリ転換とは、語の意味変化過程において、元々名詞であっ

たものが形容詞的、動詞的に用いられるようになる、いわば品詞を変える現象である。以下では、この意味変化に伴うカテゴリー転換が、認知言語学的にはプロファイルシフトで捉えられるものだと議論する。

認知文法では名詞は境界を持ったモノ(thing)をプロファイルするもの(4a)、そして形容詞や副詞、動詞などは(4b)のようにモノとモノとの関係(relation)をプロファイルするもの(4b)と特徴づけられる。更に、モノと関係との違いは、どこに意味の焦点を当てるかというプロファイルの違いとされている(4c)。このため、同じ状況でも、どの部分にプロファイルをあてるかで、名詞的に捉えられたり動詞的、形容詞的に捉えられたりすることが可能になる。

- (4) a. A nominal predication profiles a thing, i.e. a region in some domain, where a region is characterized abstractly as a set of interconnected entities.
 b. A relational predication puts interconnections in profile.
 c. A nominal and a relational predicate are therefore distinguished by the nature of their profiles even should they have the same entities and interconnections for their base. (Langacker (1987: 241-5))

例として(5)を見てみよう。(5a)では前置詞*beside*がプロファイルするのはthe wheelbarrowとthe shedというモノとモノの「関係」である。しかし(5b)では、前置詞句*beside the shed*が通常名詞が来る主語位置に現れており、名詞としてのカテゴリー性を帯びている。認知文法に従えば、Figure 1に示すように、(5b)はその関係も背後に踏まえつつ、直接的にはその位置特定に関わる領域 (Search Domain : SD)という抽象的空間をプロファイルする、名詞カテゴリー的な表現ということになる。ここにもプロファイルシフトが関わってきている。

- (5) a. The Wheelbarrow is *beside the shed*.
 b. *Beside the shed* is all muddy. (Langacker (forthcoming-b))

さて、i)-iii)の概念の具現化例として、*face*という体の一部を表す語の意味変化を簡単に観察してみよう。*face*は(6)に見るように、「頭の前面にある一

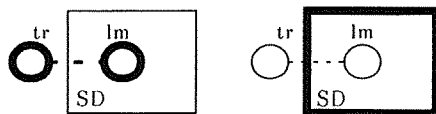


図 1

部分としての顔」を表す名詞用法から、次第にin the face of 等前置詞句と共に慣用句として用いられるようになり、比較的最近になって動詞としての用法が出てきた。

(6) face: [OED]

(n.) The front part of the head, from the forehead to the chin; the visage, countenance:

c1290 *S. Eng. Leg.* 169/2178 More blod Tar nas in al is face.

(ph.) in (the) face of: in front of, directly opposite to;

1766 T. Page *Art Shooting* 36 When a bird comes directly in your face, Contain your fire awhile.

1879 Dowden *Southey* 14 He was for the first time in *face* of the sea.

(v.) In weaker sense: To look in the face of; to meet face to face; to stand fronting..

1779 F. Burney *Diary Nov.*, If I *faced* him he must see my merriment was not merely at his humour.

1883 *Manch. Exam.* 24 Nov. 5/2 The great problem which *faces* every inquirer into the causes of colliery explosions.

このfaceという語はその背景に様々な関係性をふまえている。例えば、「体・頭の前面にある」という位置的なものから、他人とinteractionを行う場合に典型的にとる「方向・向き」などに代表される、様々な関係性までもが前提とされている。faceの原義は、その関係性のある一部分に焦点を当てた表現であるが、時代が下るに従って、体の一部分である「顔」の意味から、その「表情」を表すようになり、更にはその「向き・方向」など、当初前提として背後に隠されていた関係性が徐々にfaceの意味に積極的に取り込まれた。つまり、体の一部からそれを取り巻く関係へと、語が表す意味の焦点が

移った、つまりプロファイルシフトが起こったと捉えられるのである。

また、モノから関係性へと意味が拡張すると共に、*face*自体の意味も、「動物の顔の一部」という具体的な意味から「モノの表面」といった抽象的な意味へとスキーマ化されていく。そして、*face*の適用される領域は有生物に限らなくなり、*in the face of the sea*と、有生物以外の「顔」をもたないものにも適用されるようになっていく（1879年の用例参照）。これは先程見た(ii)のドメインシフトとも関わってくる点である。

さて、(6)の*face*など体の一部を表す語は名詞カテゴリーの意味と動詞カテゴリーの意味とを併せ持つ。一見この二つのカテゴリーは互いに全く異なる別物という印象を受けるため、名詞から動詞への意味変化はカテゴリーの大転換を伴うことになる。しかし認知文法のように、文法カテゴリーにも意味的な動機づけを与える立場であれば、このカテゴリー転換を、もともと前提とされていたinterconnectionへのプロファイルシフト、つまり意味のずらしと捉えることができる。Rubba(1994)が(7)で指摘するように、カテゴリー転換は、形態的・統語的にも大きな変化という帰結をもたらすが、それをごく自然な段階的な変化の中での小さなステップとして捉え直せるわけで、これは認知言語学的アプローチのもつ特徴の一つと考えられる。

- (7) The Cognitive Grammar analysis reveals that a category change that is quite significant in its morphosyntactic consequences is a rather small step in terms of the internal semantics of the grammaticizing element. (Rubba (1994: 94))

更にもう一つ、意味変化に関わる重要な概念に、iv)の主体化 (subjectification)がある。主体化とは、「誰の視点から語るか」の推移として捉えられる((8))。具体的には、文法上の主語から目的語へむけて行使される動作主性が次第に弱化されることが、意味変化、ひいては話者の介在を前面に押し出す主体化への動機づけとなることを指摘している((9))。

- (8) Subjectification: An objective relationship fades away, leaving behind a subjective relationship that was originally immanent in it (i.e., inherent in its conceptualization).

- (9) A common type of semantic change is attenuation in the degree of control exerted by an agentive subject. It figures in grammaticization, and often results in subjectification as well as the transparency of highly grammaticized forms. (Langacker (1997))

具体例として、前置詞*across*の例を見てみよう。

- (10) a. Vanessa swam across the river.
b. Vanessa is sitting across the table. (Langacker (forthcoming-b: 5))

(10a)では「バネッサが実際に川を渡る」という物理的な移動が前置詞*across*の意味として示されている。これに対し、(10b)では実際の移動はなく、バネッサとテーブルとの間の関係経路は話者により心的に辿られるのみである。つまり、バネッサはテーブルに対して何ら直接的な動作主性を行使していないという点で、関係経路の弱化がみられることになる。

この主体化が動詞に現れた例として(11)を見てみよう。*promise/threaten*には「約束」という発話行為を行うコントロール動詞としての用法の他に、「～という見込みである」という意味を表す認識・繰り上げ動詞としての用法があり、歴史的にも後者が後発である。

- (11) a. John *promised* to come tomorrow.
b. Tomorrow *promises* to be a fine day. (Traugott (1993))

(11a)では文法上の主語であるJohnが実際に約束を行って、「明日来る」という事態を引き起こす準備条件を提示しているため、主語はその補文に対して動作主性を行使していると言える。しかし(11b)では、*tomorrow*が動作主性を行使して「明日晴れる」という事態をひきおこしているとは言えない。むしろこの文の発話者による「判断」というメンタルレベルでの弱化された方向性が見られるだけである。つまり、言語描写されている場面の中に話者自身がとりこまれた結果、補文対象への物理的コントロールが話者の心的経路に置き換えられているのである。このように、文主語からの直接的な動作主性公使力が弱化されるに従って、話者の判断などの心的な側面が前面に押し出されてくることになる。

以上、(i) プロファイルシフト (ii) ドメインシフト (iii) 主体化 の3つの概念を、具体例を通じて概観してきた。次の3節では、これらの考え方を、ケーススタディとしてhave動詞補文構造の多様性に当てはめて考えてみたい。

3. have補文の変遷について

haveがとる補文構造タイプには様々なものがあることは先に観察した通りであるが、歴史的に見ると、その生起した年代には差が見られる。表1は筆者がVisser 1973及びOEDを調査した範囲でのデータである。またこの生起順及びそのずれについてのBaron(1977)のコメントを(12)に引用する。

表1 have補文の変遷

have + O + A	OE -----
have + O + -ing	OE -----
have + O + p.p.	OE -----
have + O + inf.	1385-1450a -----
have + O + N	1422-1509 -----

(Visser (1973)及びOEDの記述に基づく)

- (12) Have is first documented as a causative with clausal, locative, adjectival, and past participial complements at approximately the same date (c1200). Infinitive and noun complements are not documented for at least another century (late 14th century).

(Baron (1977: 82))

いずれにしても、目的語の後に来る要素がもともとは形容詞や過去分詞形だったものが、不定詞形へと変化し、最終的に名詞補部をとるまでにその補文構造を拡張したという事実がわかる。特に名詞補部が現れるのは時代的にも16世紀以降であり、その拡張過程の多様性が伺われる。

このような補文構造のカテゴリー転換現象には、先程2節で見た認知言語

学概念であるプロファイルシフト、つまり意味の焦点をずらすという操作が関わっていると捉え直せる。この考え方を説明するために、まずこれら補文構造に生じているカテゴリーが認知言語学でどのように捉えられるかを概観しよう。

認知文法の枠組みによれば、haveの補文構造を成すカテゴリーとしてここで挙がっているもののうち、分詞（現在分詞・過去分詞）は形容詞と同様、図2に挙げるように時間の関わらない、モノとモノとの関係（atemporal relation）を表し、全て名詞をターゲット(trajector)とする機能を持つと考える。

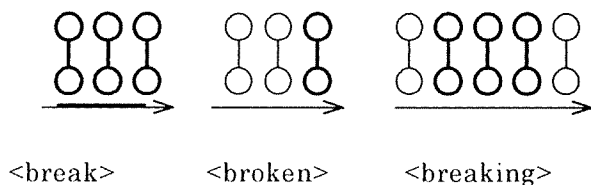


図2 (Langacker (1987:221))

過去分詞(broken)は、図のように、展開していく事態の一部である最終状態のみをプロファイルするものであり、現在分詞(breaking)は事態の始まりと終わりを除外した一部、つまり事態の内部構造をプロファイルすると考えられている。重要なことは、事態のどの部分をプロファイルするかは異なるものの、いずれの分詞もその前提として、原形動詞(break)で表される全体としての事態展開を踏まえていることである。

このように考えると、have構文の補文構造に見られるカテゴリー転換の推移は以下のように捉えられよう。Have補文に当初生じていた過去分詞や現在分詞は、元来はあくまでも目的語名詞を修飾する形容詞としての機能を発揮していた。そして次第に当初から存在していたベースの部分、つまり全体的視野へとプロファイルが移行し、次第にその補文カテゴリーの適用可能性

が広がったと考えられることから、このカテゴリーの変遷が動機づけの与えられる自然なものであったと理解される。

- (13) a. John had *a book* in his bag. [THING in Relation]
 b. John had *a book* written by some great novelist. [THING in Relation]
 c. John had *a book written by some great novelist*. [THING in/with RELATION]
 d. John had his child nursed. [thing with RELATION]
 e. John had *his dog die of snake bite*. [(ATEMPORALIZED) PROCESS]

この考え方を支持するために、補文のカテゴリー発展に伴う述語の意味タイプの変遷について考えてみたい。実際にデータをみると、同じひとつの統語カテゴリーを成すと考えられる中にも意味的段階性を成しているものが多く見受けられる。この段階的連続性は、(14)のように想定することができる。

- (14) have + O + A/p.p (having an object in a certain state) の補文が動的な意味合いを帯びるようになり、次第にhave + O + Vへと拡張されてくるようになった。その際、拡張元となるp.pや形容詞との類似性から、V-slotには初期の頃にはまずstative verbsに準じるものが生じ、後に他動性の高いaction/causative verbsへと発展した。

この考え方は、話者が既存の言語表現との類似性に基づいて（動機づけられて）次第に拡張を行っていくことで、文法も時代と共に変化していくという、2節で概観したUsage-Based Model (Langacker (forthcoming-a))の精神とも合致するものである。

まず、形容詞や過去分詞は古くOEの時代から用いられているが、原形不定詞が見られる時代になると、いわゆる結果状態だけではなく、その動作というプロセス・過程そのものを修飾する副詞との共起例が見られる。例えば(15a)の修飾句with careは結果状態というよりそこへ至るプロセスを修飾する役割を強く表しており、形態と意味との不一致、ズレがここに見られ始める。

- (15) [V + O + Adj./pp.]:

- a. These things also ... *have me so envolved with care*.

[c1385 Usk, *Testament of Love* 8, (Visser)]

- b. Thei *have him oultreli (=completely) refused*.

[1390 Gower, *Conf.*(OED) III.]

原形不定詞の例が出始めるのは1300年後半以降だが、初期の頃には(16)のようなbe動詞や、一般動詞も(17)にみられるような状態動詞が多い。しかし注目すべきは、beという動詞が(16)で現れているという事実である。be動詞はここでは後に分詞がきていることもあって、省略してもさほど意味が変わらないように思われる。しかし実際には、be動詞が存在していることで、過去分詞や形容詞などに代表されるstativeさとは異なり、次第に動的な意味合いを増していることになる。

- (16) [V + O/S + Infinitive]:

- a. how able hiis for to *have* ... the thriftyeste *To ben* his love.

[1385 Chaucer, *Troil.*(Visser)]

- b. te entent of conuentual religiosis persoonys was forto haue her monasterie
to *be* not oonli as a tempe!... [1443 Pecock, *Reule Crysten Relig.*(Visser)]

- c. there is not always so great necessitie to *haue* the childe *bee* withe the
mother. [c1513 St.Thomas More, *Wks.*(Visser)]

- (17) a. he wolde *have* his reigne *endure and last*.

[c1413 Hoccleve, *Reg. Por.* (Visser: 2266)]

- b. ..wolde she *had* hym to *lye* by her. [c1470 Malory, *Wks.*(Visser)]

そして1400後半から1500以降になると、(18)のように、他動性の高い他動詞の例が増えてくる。

- (18) a. This is the Glasse Ladies wher-in I woulde haue you..*rubbe out the
wrinckles of the minde*, and be not curious about the weams in the face.

[1580 Lyly, *Euphues* (OED) 463]

- b. You would *have* us *baptize our Bels* to make them spirituall.

[1655 Baxter *Quakers' Catech.* (OED) 23]

c. *He hadd a certane of his knyghtes nakne tam & swyme ouer te water.*

[c1440PLA_{lex}.69/11(MED)]

このように、カテゴリー転換期の例では、カテゴリー間の区切りが明確につけられるわけではなく、実際には意味的にも段階的連続性をもつことがわかる。このような細かい観点を考慮に入れてみると、史的な変化というものを連続体を成すものとして捉える考え方の利点が強調されることになるのではないだろうか。

以上、補文構造の発展過程で生じるカテゴリー転換が、同じ状況に対する焦点の当て方を変えるという、Figure-Ground転換に基づくプロファイルシフトとして捉えられることを見た。この考えによれば、カテゴリー転換とは決して突然の大きな飛躍の現象ではなく、元の構造からの自然な1ステップとして捉え直せること、またカテゴリー転換が成された後でも、原形不定詞の述語が初めはもとの過去分詞形と類似する状態性の高いものに限られていたのが、次第に拡張されて他動性の高いものをも許すようになった、ということが示される。この事実が示しているのは、補文構造のカテゴリー転換の推移は突然生じたものではなく、自然な段階的変化として捉える方が実状にあっているということであり、プロファイルシフトによる捉え方の有効性を支持するものと考えられる。

4. haveの意味の変遷とhave補文構造の拡張

4.1 have構文の意味の多様性

Brugman(1988)は、Haveの補文構造及びその意味に関して詳しく議論し、(19)に見るようにhave構文全体の意味を大きく4つに分け、共時的観点からそれぞれCausative, Resultant State/Event, Affecting Event, Attributiveとしている。

(19) a. *She has children come to her house every Sunday.* [CAUSATIVE]

b. *I had him angry./I had the dishes washed in no time.*

[RESULTANT STATE/EVENT]

c. I had two dogs die of snake bite. [AFFECTING EVENT]

d. I have keloid tissue on my back./He has a fly resting on his nose.

[ATTRIBUTIVE]

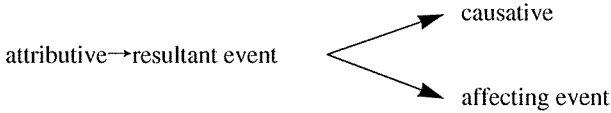
これら4つは補文のタイプ及びその意味により、簡潔に(20)の表にまとめられる。縦軸の[Resultative/Circumstantial]は補文事態が表す意味であり、横軸の[±Perfective]は補文の事態のアスペクトを示す。(19a)のCausative及び(19b)のResultant Event/Stateの場合、補文の事態は引き起こされる結果であり、(19c)(19d)では補文事態はそれぞれ付帯状況的に解釈される。また(19a)のCausative, (19c)のAffecting Eventは補文がアスペクト的に+Perfective、典型的には原形不定詞であり、(19b)(19d)は逆に−Perfective、典型的には形容詞や分詞句等と分類されている。

(20)

	+PERFECTIVE	−PERFECTIVE
RESULTATIVE	Causative (19a)	Resultant Event/State (19b)
CIRCUMSTANCIAL	Affecting Event (19c)	Attributive-Existential (19d)

ここで、3節で見た補文のカテゴリー転換及びその述語タイプの変遷を思い出してみよう。have構文の補文は、名詞の叙述としての役割を主とする形容詞から、プロセスの一部をプロファイルする分詞へ、そしてプロセス全体をプロファイルする原形不定詞へと発展した。(20)の表とつきあわせると、(19d)のAttributive用法では名詞の修飾としての役割を色濃くもっている(attributive: He has [a fly [resting]])と分析できるので、名詞の修飾的な傾向が強い)ため、先程の議論に基づけば、比較的早くから存在したと位置づけられる。また[+Perfective]補文を要求するCausative用法(19a)やAffecting Event用法(19c)は、補文カテゴリーの発展からいっても後に確立したと推定される。またResultant Event/State用法(19b)は、意味的にもCausativeと区別が付けにくいとされるが、補文形式を考えると、より元々のattributive用法に近いと分

類されよう。以上をまとめると、歴史的には(19d)のAttributive-Existential用法が基になり、その補文がevent的な解釈を帯びるようになって(19b)のResultant Event/Stateに移り、最後に原形不定詞の発達に伴ってCausativeとAffecting Eventに二手に分かれたと考えられる。



さてここで疑問となるのが、何故have構文は同じPerfective補文をとりながら、全体としてCausativeとAffecting Eventという、一見異なる二つの意味を持つようになったか、である。(19a)も(19c)も同じく原形不定詞を取る形だが、Causative用法ではhaveの主語が補文事態の成立に働きかけっていると解釈される一方、Affecting Eventではむしろ逆に、haveの主語が受動的に補文事態を「被る」意味を持っている。この違いは一体どこからくるのだろうか。何故一見逆方向に見える意味を表すようになったのだろうか。

この問題への手がかりを探るために、まずhaveという動詞そのものの語彙的意味に今一度目を向け、その意味構造について再考してみたい。

4.2 haveの意味の変遷

Langackerの提唱する認知文法の枠組みに従うと、動詞haveは我々の普遍的な認知能力の一つである、Reference-point modelを反映したものと考えられる。Reference-point modelとは、あるものを認識、識別する際に、何か手がかりとなるものを探し、それを起点としてターゲット認定する、という、二段階的な手段を想定する。John's hatなどの所有格表現などはこの例で、ターゲットであるhatを同定するのに、Johnという手がかり、中継地点を経てゆくという認識手法が文法化されていると考えられる。動詞haveも同様にこのモデルを文法化したものだと思われているのである。

図3が表すReference-point modelは、haveの多様で広範囲な意味を抽象

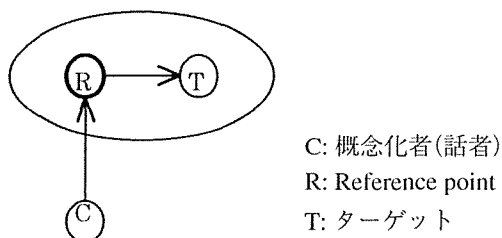


図3：Reference point model

的・スキーマ的に、いわば包括的に捉えたものである。しかし勿論、ことはそれほど単純ではなく、実際に個々の例を見ていくと、Reference pointからTargetへ実際に行使する力の程度が様々であることがわかる。例えば(21a)には「ナイフを手元に実際に持っている」という直接的な力の行使が見られるが、(21d)になると、コントロールはもはや直接的にも間接的にも見られず、主語は受動的経験の「場」としての関係となっている。さらに(21f)では単に「場所の特定の手がかり」としての位置づけでしかなくなっていることに注意したい。この推移は図4の(a)→(c)として簡単に示される。

- (21) a. Be careful—she has a knife! [source of immediate control]
 b. I have an electric saw (but I seldom use it). [source of potential control]
 c. They have a good income from investments. [locus of experience, abstract control]
 d. He has terrible migraine headaches. [passive locus of experience]
 e. She has red hair. [passive locus of potential experience]
 f. We have some vast open areas in the United States. [locational RP]

ここで補文をとるhaveはどのあたりに位置づけられるか、その意味を考えてみよう。補文をとるhave構文におけるhaveの意味は、(22)でVisserも指摘するように、典型的に「経験」としての意味であり、多くの文脈でseeやfindなどの知覚経験動詞と交換可能であるとされている。また、(23)のJespersenも、過去分詞や現在分詞を補文にとる類のhaveは現代英語でも‘experience’とい

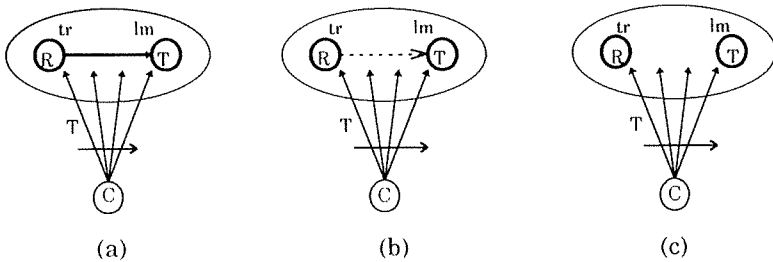


図4：haveの主語からの行使力の多様性

う特殊な意味となっていることを指摘し、Mental Perceptionの仲間として扱っている。よって少なくとも図4 (b)以降の段階に位置づけられる。

(22) ...it [= 'have' in VOSI] expresses experience and can in many contexts be replaced by *see*, *find*, etc. (Visser 1973: 2266-68)

(23) Here(=the chapter on Mental Perception) we may place *have* in a special sense, nearly = 'experience'. (Jespersen V: 281)

更に、中右(1998)ではhaveを所有のhaveと存在のhaveに分けて考える必要性を議論し、前者が<所有>を記述する構文であるのに対して後者は<経験>を記述する構文であると主張して、本稿での補部をとるhaveと平行して考えることを議論している。

(24) a. <所有have>: Ann has a car./John has only one parent.

b. <存在have>: Mary has smoke in her eyes./Jim's coat has dirt all over it.

所有のhaveは主語と目的語の間に何ら内在的な関係（部分全体関係など）がなく、いわゆる場所を表す前置詞句を後に伴わないが、一方存在のhaveではこの前置詞句表現が必須であり、また主語と目的語の間には内在的な関係が成り立っている。このように、目的語名詞の後に前置詞句が必要であるという形式パターンは、先程来見ている補部構造をとるhave構文のパターンと類似していることがわかる。つまり、have構文は、<所有>を表すhaveではなく、<存在>を表すhaveにその萌芽がみられるものということになる。

この中右の観察は本稿の考え方に沿うものである。先程の図で説明すると、

動作主性を保持した図 4 (a)及び(24a)では、所有という権利を行使する<所有>のhaveということになり、一方図 4 (c)では場所を特定する際のReference pointとしての機能を発揮する、<存在>のhaveであると言える。また、中右が分けるべきだと主張している<所有>と<存在>のhaveの変移も、動作主性行使の強弱の度合いということで位置づけられることになる。

以上の議論から、補文構造をとるhaveは経験の意味を中心として表すと言って差し支えないことがわかった。ここまではhaveの表す様々な意味を共時的に表してきたが、以下では少し視点を変えて、haveが通時的にはどのような変遷を辿ってきたか、そして経験の意味はいつ頃どのように生じたのか、を探ってみる。

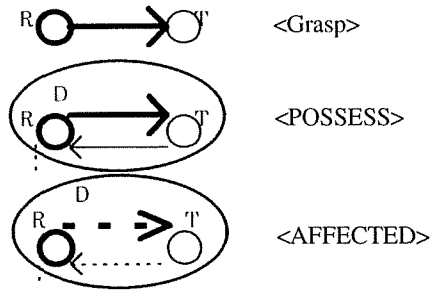
4.3 haveの意味構造及びその通時的変遷

OEDの記述によれば、元々haveは<手に持つ>とか、<自分の手元にあって自由になる>など、その主語が目的語に対して直接コントロールを行使する意味を原義として出発した。それが次第に動作主性の弱化という、2 節で概観した主体化に伴う一般的意味変化の傾向に伴って、「経験」という意味を持つようになったと考えられる。OEDでは<grasp>という原義に続いて、<possess the relation>という、典型的にkinship relationなどで用いられる、reciprocalな関係をも表すような意味の弱化を経て、「経験」という意味、つまり、対象を直接コントロールしないが、対象にメンタルコンタクトを行う、という意味の弱化を見せたのである。

(25) The Development of HAVE (OED have v.)

<GRASP> To hold in hand, in keeping, or possession; to hold or possess as property, or as something at one's disposal. disposal.[Beowulf (Z.), c888]

<POSSESS THE RELATION> To hold or possess, in a weakened sense; the relation being other than that of property or tenancy(.) *The relation is often reciprocal: the father has a son, the son has a*



father; the king has subjects, his subjects have a king; (...) a man has a house, the house has an owner or tenant.[c1000] (italics mine)

<TO BE POSSESSED OR AFFECTED WITH> To be possessed or affected with (something physical or mental); to be subjected to; to experience; to enjoy or suffer. [c1000] (e.g., He had very bad health.)

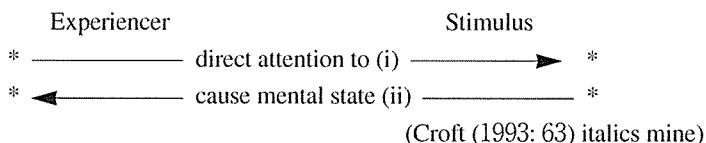
さて、haveの意味が、状態に働きかけて獲得・所有するという物理的領域から「経験」という精神領域へとドメインシフトをおこし、「経験」の意味をも表すようになると、主語から対象へ向けての非対称的な方向性は、物理的他動性のような絶対的なものではなく、次第に相対的で希薄な単なる関係、つまり受け手の解釈によっては逆方向にたどることも可能な、柔軟な性質をもつ関係へと移行したことになる。

このような関係の「逆転」は、一見不自然に思われるかも知れないが、実はそれほど珍しいことではない。むしろ、経験という、意味が弱体化された領域であるからこそ、「逆転」が ocorrência やすいのである。このことは、経験という事象は二方向性を持つ、としばしば指摘される事実から根拠づけることができる。

一般に、人間の心理状態描写の背後には、その心理状態を引き起こす刺激 (Stimulus) と、その心理状態を抱える経験者 (Experiencer) とを設定するのが普

通であるが、実はこの両者間の関係の捉え方に二通りの方向性が想定可能であるとしばしば指摘される。例えばCroftは(26)において、(i)経験者が刺激に対して注意を向ける方向性と(ii)刺激が経験者に心理状態を引き起こすと捉える方向性との2つがあると述べている。

- (26) There are two processes involved in possessing a mental state (and changing a mental state): (i) the experiencer must direct his or her attention to the stimulus, (ii) the stimulus (or some property of it) causes the experiencer to be (or enter into) a certain mental state. Thus, a mental state is actually a two-way causal relation, and is better represented as follows:



このように考えると、以下のような道筋が見えてくる。即ち、動詞haveの意味は、その主語が対象に対して持つコントロール・力が弱化されることにより、対象に単にメンタルコンタクトをするだけの、知覚経験的な意味になった。その結果、目的語は「手に入れることのできる具体物・モノ」だけではなく、より抽象的な「事態・コト」をも表せるようになり、より複雑な補文構造の発展が可能になったと推測できる。また同時に、haveの意味がメンタルコンタクトをするという「経験」の領域に移ったことにより、双方向性という、Mental State一般に見られる相対的な関係性を表しうることになった。この双方向性の獲得を通じて、影響を「被る」という、逆方向の関係をも同時に背後に帯びる可能性が出てくることになり、やがてその意味範囲の中にとりこまれたと考えられる³⁾。

4.4 have構文の確立について

さて、このhaveの意味の変遷と、知覚動詞グループが原形不定詞をとる形式の発展とを比較して表にしてみると、以下のようになる。

表2 haveの意味変遷とその他の動詞による構文の発展

	OE	ME					ModE				
	OE	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
have の 意味変遷	“grasp” (880c) ----- “experience” (1000a) -----										
have の 補文形発展	have+O+A(850) ----- have+O+p.p.(850) ----- have+O+inf. (1385/1450a) ----- have+O+N(1422/1509) -----										
知覚動詞 構文の発展 (V+O+inf.)	(established around late OE or ME) ----- see:OE ----- hear: Early ME(1127) ----- feel: Early ME(1384) -----										
使役動詞 構文の発展 (V+O+inf.)	do: OE -----Early ModE let: OE ----- make: (OE)ME -----										

2節で見たusage-based modelの考え方では、カテゴリーの拡張を、類似性に基づく拡張と共通性に基づくスキーマ抽出との2本建てを基軸として進んでいくものと考えている。このモデルに基づいて構文カテゴリーの成立・獲得を通時的に（かつ言語習得的に）考えてみた場合、一つの主張が浮かび上がってくる。即ち、構文の成立・獲得には、ある程度の数の基本的中核を成す動詞がそのメンバーとして必要であり、そこから構文と呼ばれる骨組みが抽出されるという主張である。例えば、いわゆる二重目的語構文と呼ばれる表現形式には多種多様な意味が見られるものの、ある共通性を（一つではないにしても）取り出すことが可能である（Goldberg 1995参照）。この場合、最初から構文形という鋳型がアプリアリに存在していたとは想定しがたい。むしろ、初めにgiveやsendなど、中心的意味を担うと考えられる動詞がその形式で用いられ、それがある程度定着した時に初めて、それらの中心的動詞

がとるパターンから、共通性としてのスキーマ（この場合は構文形という類型）を抽出することが可能となり、更に様々な動詞へと適用されるようになると思えるのが妥当である。つまり、構文の「立ち上げ期」に於いては、個々の動詞レベルにおける定着度に基づいたスキーマ抽出が先行し、それから類似性に基づく拡張が出番を迎えると想定できる。

この考え方はhave構文の発展にも当てはまる。haveは動作主性の弱化に基づいてその意味を変化させ、「経験」という、知覚動詞に類する意味を獲得するに至った。この「経験」という知覚動詞のカテゴリーに十分含まれうる意味が確立して後に、原形不定詞をとる知覚動詞構文との類推が可能となり、この構文形の適用が始まったのではないかと考えられる。haveの「経験」用法はすでに1000年頃には見られるものの、この時点では逆に、先行する知覚動詞の方が（特にsee以外は）まだV-O-inf.形を確立していない時代でもある。つまり、haveが経験の意味を獲得したあたりでは、知覚構文の萌芽は見られるものの、まだその構成メンバーはseeのみであるので、構文としてはまだ確立していない、と言えよう。初期MEあたりになって、feelやhearなど典型的な五感を表す動詞もこの形式に参与することとなり、いわゆる知覚を表す動詞がほぼ出そろったことになるが、ここでようやくV-O-inf.形式が「構文」として確立したと考えられる。このことを補足するコメントとしてVisserを挙げておきたい。

- (28) The number of verbs in early Old English occurring in the VOSI is comparatively small.(...) In later Old English the idiom spread with striking rapidity, so that before the beginning of the Middle English period one already comes across a sizable number of instances.(...) *This spread may be due to analogy* as well as to the speakers' awareness of the inadequateness, in point of specification, of the frequently used construction of the type (...).

(Visser (1973: 2235): 斜体は筆者)

このパターンが、ある程度の数の動詞に適用できる「構文形式」として確立した時、他の動詞へと拡張する素地ができあがったことになる。haveは知

覚動詞に類する意味を持つが、いわゆる知覚動詞ではない。そのため、最初からこの構文抽出に貢献することはないが、構文確立期の後、動詞の意味及び形式などの部分的類似性に基づく類推が働き、原形不定詞をとることが可能になったと考えられる。この考え方はまさに、「動詞の意味が、その構文の中心クラスタの意味と合致するよう変化すれば、構文適用が起こる」とする、Goldberg(1995)のUsage-Based Modelの精神と合致する。

使役構文への参与についても同じようなことが言える。この構文形は使役動詞構文とも一致しているため、make等との類推も同時に生じ、後には補文に名詞をもとるようになったのではないかと思われる。出現時期も16世紀半ばと最も遅い。つまり、まず知覚動詞への歩み寄りを通じて、使役構文との共通性を獲得する道が開かれたと考えられる。

形式の類似性に基づく経験用法から使役用法への類推は、haveのみにとどまらない。haveと同じ意味領域に属する他の動詞にも、類推と思われる拡張例がみつけれられる。haveが動作主性の行使が弱化された関係、つまり「経験」の領域へとその意味をシフトしたことは先に述べたとおりであるが、同様に動作主性の弱い知覚動詞seeにも、一種「使役」的な用法が、haveより後に、一時的に拡張されている。

(29) See (= see to it that: 1548—1623) (Visser 1973: 2263)

a. Now see the most be made for my poor orphan

[1600 Ben Jonson, *Alchemist* (Everyman.) III, ii:42]

b. lead the troop, John; And Puppy, see the bells ring.

[*Ibid.*, *Tale of a Tub* (Everyman.) I, iii: 580]

(29)の例はVisserがcausing verbに分類していたものである。このseeの用例は寿命が短く、Visserの例も1548～1623の約100年間に限られている。このseeは「～するよう準備を整える・取り計らう」という、現在ではsee to it that...で表される意味ではあるが、弱いながらも補文事態の成立への働きかけが見られる点で、使役的ニュアンスがあると言える。このように、＜動詞＋目的語＋原形不定詞＞という形式のスキーマに引きずられて、使役に準じるニュ

アンスが、経験の意味を表すhaveだけでなく知覚動詞のseeにまで、一時的に拡張された例と見なせるのではと思われる。つまり、形の類似性から、have以外の知覚経験動詞にも拡張の可能性はあったということである³⁾。形の類似性に基づく経験用法から使役用法への類推が、haveのみに見られる特異的なものではなかったことが伺える。

また、使役動詞makeとの類推を促進したもう一つの重要な要因として、望み・願望を表すwill/wouldとの共起が頻繁に起こったことが挙げられよう。筆者が歴史的データを見た限りでは、使役の意味を表すと解釈できるもので、will/wouldと共起しない純粋な使役を意味する例は少ない。このwill/wouldの共起は13世紀頃から見られ、OEDのデータやVisserの例でも、実に70%前後という高い割合を示している⁴⁾。実際初期の用例ではwill/wouldなしで使役的な意味を表している例を見つけることは難しい。特に第1人称で頻繁に用いられており、固定した用法であったことが伺える。

Visserの指摘によれば、will/wouldと共起するhaveも、もともとの経験の意味を保持している。例えば、I will have you wear a thick coatという文章は、言い換えて見ればI want to see you wear a thick coatというように、先程と同様、知覚経験seeによって置き換え可能な、弱化された意味であると述べている。

- (30) [...] have, in the group ‘he wouldn’t have’ has retained its fundamental meaning of ‘to have one’s eyes open’ = ‘to see (physically and mentally)’— ‘to experience.’) Thus ‘I will have you wear a thick coat’ = ‘I want to see you (wear) a thick coat’ and ‘What would you have me do?’ is tantamount to ‘What do you wish to see me do?’

(Visser (1973: 2265-66))

このwill/wouldとの共起という、別の外的な要素が介入することによって、have構文全体が使役への発展を見せたと考えられる。

上記の傍証として、現在分詞カテゴリーを補文にとるhave構文が見せた使役用法の発展を挙げたい。-ing補文をとるhaveは長い間attributive用法で用いられており、Resultant Event/Stateに当たる、より使役に近い用法は、かなり

最近になって発展した模様である。

まず、Visserで経験用法として分類されているものを見ると、Brugmanのいうattributive用法とされるものが多い。(31)に見られるようなこの用法はOEから現在に至るまで散見される。

(31) OE, ME, ModE.:経験用法

a. I *had* now no poverty *attending* me.

b. You had better take care... or you will have an offended father or brother
pulling a bowie-knife. [1879 Henry James, *Daisy Miller* 138]

しかし19c.半ば以降、will/wouldとの共起、典型的にはwon't/wouldn'tという否定形との共起により、refuseやnot allowと同様の、拒絶や不許可を表すもの、つまり使役に準じる例が見られるようになる。(32a)では「言うという状態にしない」、(32b)では「家に入るという状態にしない」、という意味になり、いずれも(否定を通じてではあるが)「ある状態を生じさせない」と言う点で主語がバリアを課していることになり、force-dynamics的に使役の意味が備わってることがわかる。

(32) 9c.半ば(1864-)以降:使役の用法 (I refuse, I don't allow)

a. She would not have Hopkins *telling* she watched her daughters.

[1864 Trollope, *Small House at Allington*]

b. will not have dirty old men like that *coming* into the house.

[1913 Hugh Walpole, *Fortitude*]

c. I won't have you paying for my drinks.

そして20世紀になって、(33)のようにwouldなしでも使役の意味が色濃く出た例が見られるようになった。(33a)では時間表現in ten minutesとの共起から、-ing形という状態的な補部でありながら、event的解釈が強く出ていることが分かるだろう。

(33) 20c.以降(1927-) : 使役用法

a. In ten minutes she *had* them all *crying*.

[1927 Sincl. Lewis, *Elmer Gantry*]

b. I was in court when he testified and he *had* me sweating.

[1961 H. Judd, *Shadow of a Doubt*]

c. His self-consciousness had her reacting away from him, whereas only a moment ago she had been responding to the unconscious warmth of his smile.

[1962 Lessing, *Golden Notebook*]

このように-ing補文は、動作主性を弱化させた経験の意味のhaveを出発点とし、will/wouldと共起する段階を経て、使役用法への歩み寄りを、しかも比較的最近になって見せている。このことから、haveの使役用法の拡張が現在にわたり続いていることが示唆される。

5. 結論

本稿ではプロファイルシフト、ドメインシフト、スキーマ化、主体化等の認知的概念が歴史変化研究にどのように応用できるか、その可能性をいくつか例を取りあげて検討し、更にそれらを統合するケーススタディとしてhave構文のカテゴリーの変遷及び意味の発達の一側面について議論してきた。論点は次の4点である。

- 1) haveの意味が<掴む>等、<所有>へ向けての動作主性の行使力があるものから、そういったものがない<存在・経験>という意味の領域へ移ることには、主体化及びドメインシフトといった認知言語学的概念が絡んでいると捉えられること。
- 2) haveの補文カテゴリー転換は、「意味のずらし」であるプロファイルシフトという考え方に基づいて、自然な一ステップとして位置づけられること。
- 3) 補文・そこに生起する原形不定詞の意味の変遷が基の意味とあまり変わらないものと連続体を成すと言うことが、認知言語学で近年提唱されつつあるUsage-Based Modelの精神に合致すること。
- 4) have構文全体が大きなプロトタイプカテゴリーを形成し、使役・経験・受動のhave構文もその下位に位置づけられるということ。

このように、認知言語学的発想が歴史的語義・意味変化に貢献できる部分は多いと思われるが、実情はまだ発展途上である。本論もケーススタディであり、より魅力的な議論を目指すならば、歴史的事実とのもっと精緻な突き合わせを行って検討する必要がある。例えば語の適用範囲が拡張されるという全体的視野のみならず、その語の内部意味構造のどの部分がこういった理由・動機づけからどのようなメカニズムを経て変化していったのか等、より精緻な疑問に認知言語学的道具立てが回答を与えてゆける余地があると思われる。今後さらに具体的な事例研究を積み重ねて考えていくことが課題である。

注

* この論文は第15回日本英語学会大会シンポジウム『認知言語学と史的变化』(1997年11月24日：於東京都立大学)における口頭発表を下敷きに、加筆修正・発展させたものである。

1) Baron (1977)では初出はMaloryのMorte d'Arthurの1470-85のもの、Visser(1973)では1422-1509のものとなっているが、いずれにしても最も後発の用法であることには違いはない。

2) 共時的な観点からいっても、動詞beがある方がevent性がより高い(よってcausative読みを誘う)という指摘もBrugmanによってなされている。

(i) a. Have him clean and tidy for the piano recital: [Result state]

b. Have him be clean and tidy for the piano recital: [Causative] (Brugman1988: 174)

3) 動詞letやmakeなど、haveと同様に原形不定詞をとる動詞は、使役を表すこととはできるがいわゆる「被る」というこの逆の方向性を表すことは出来ない。一方getなどはhaveと同様にこの受け身に似た表現を発達させている。これはgetとhaveがいずれも受容を表す意味の動詞であることから説明できるのではないか。いずれも主語が動作主というよりも経験者である。経験者であることから、双方向性の可能性が出てくると言える。

4) しかしseeの方がhaveよりも知覚経験の内容が具体的であるので、十分にスキーマ

化されなかったのかもしれない。

- 5) OED及びVisserの用例では1400年代で50%、1500年代で70.9%、1600年代で76%、1700年代で72%、1800年代でも68.8%となっている。

主要参考文献

- Belvin, R. (1993) "The Two Causative *haves* are the two possessive *haves*," *CLS* 29, 61-75.
- Kemmer, S. and M. Israel (1994) "Variation and the Usage-Based Model," *CLS* 30, 165-179.
- Langacker, R. W. (1997) "Losing Control: Grammaticization, Subjectification, and Transparency," "A Handout of the Lecture given at the University of Tokyo in August.
- Baron, N. S. (1974) "The Structure of English Causatives," *Lingua* 33, 299-342.
- Baron, N. S. (1977). *Language Acquisition and Historical Change*, North-Holland.
- Brugmann, C. (1988) *The Syntax and Semantics of 'Have' and Its complements*. Ph.D. diss., UMI.
- Croft, W. (1993) "Case Marking and the Semantics of Mental Verbs," In J. Pustejovsky (ed.), *Semantics and the Lexicon*, Kluwer Academic Press, 55-72.
- Denison, D. (1993) *English Historical Syntax*. London, Longman.
- Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Constructional Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- Ikegami, Y. (1981) "Indirect Causation and De-Agentivization," 『東京大学教養部外国語科研究紀要』 29-3: 93-112.
- Ikegami, Y. (1990) 'HAVE/GET/MAKE/LET + Object + (to-) Infinitive' in the SEU Corpus," 『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』 くろしお出版.
- Israel, M. (1996) "The Way Constructions Grow," In A. Goldberg (ed.) *Conceptual Structure, Discourse and Language*. CSLI Publishing, 217-230.
- Jespersen, O. (1940) *A Modern English Grammar*, V (Syntax). Munksgaard.
- Kemmer, S. (1995) "An Analogical Model of Syntactic Change," A paper presented at the Conference on Functional Approaches to Grammar in Albuquerque, New Mexico.

- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.1., Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Langacker, R. W. (1995) "Possession and Possessive Constructions," In J. Taylor and R.E. MacLaury (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*, Mouton de Gruyter, 51-80.
- Langacker, R. W. (forthcoming-a) "A Dynamic Usage-Based Model," ms. UCSD.
- Langacker, R. W. (forthcoming-b) "On Subjectification and Grammaticization," ms. UCSD.
- 中右実・西村義樹著『構文と事象構造』研究社出版。
- 中尾俊夫・児馬修(編著)(1990)『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店。
- Rubba, J. (1994) "Grammaticalization as Semantic Change: A Case Study of Preposition Development," In Pagliuca (ed.), *Perspectives on Grammaticalization*, John Benjamins, 81-102.
- Stein, D. and S. Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*. Cambridge UP.
- Traugott, E. (1993) "Subjectification in Grammaticalisation," In D. Stein and W. Wright, 31-54.
- Traugott, E. (1995) "The Conflict *Promises/Threatens* to Escalate Into War," *BLS* 19, 348-358.
- Verhagen, A. and S. Kemmer (1994) "The Grammar and Causatives and the Conceptual Structure of Events," *Cognitive Linguistics* 5-2, 115-156.
- Visser, F. Th. (1973) *An Historical Syntax of the English Language*, Part III, Second Half. E. J. Brill.
- 鷺尾龍一・三原健一(1997)『ヴォイスとアスペクト』研究社出版。
- Oxford English Dictionary [OED], Second Edition, on CD-ROM. Oxford Electronic Publishing.